

第2群の座長をつとめて

川 島 和 代

(内灘温泉保養館)

第2群（臨床看護研究Ⅱ）の5席，山崎奈穂美さんは血液透析患者のリンの蓄積に着目し，食生活の指導とその後の変化を研究テーマとされた。慢性疾患患者が生活規制をかかえながらもより健康に生きていくために，食生活の整えに看護者が果す役割は大きいと考える。過去半年の採血データにより高P値を示す対象7名に，パンフレットに基づいて低P値食の指導を行い，その結果を3ヶ月後の食事摂取量と採血データで評価している。

リンという一般にはイメージがわきにくい微量元素を主に減らした食事を指導する時の技術や，指導後の患者の変化を何によって評価するかは一考が必要と感じた。会場からも具体的な指導方法について質問が挙げられた。透析患者の低P食の必要性に対して認識が変わり，生活に生かせるよう今後も事例を重ねて検討されることを期待したい。

6席の山口玲子さんの研究は29歳の男性，尋常性乾癬で入院を繰り返している患者を事例にとりあげ，AguileraとMesickの問題解決モデルを使用して患者の援助の方向性を引き出した研究であった。中範囲理論の危機理論を用いて事例を分析され，患者のよりよい方向への整えを経験した過程をまとめられた。臨床の看護者にとっては，困った時によりどころとなる理論を武器に出来る事は大きな願望であると共に感できる。

会場からは，危機理論が看護のこういった対象や場面で使うと有効なのか教えて欲しいという質問が挙げられた。今後，様々な理論を看護研究に使うことが考えられるが，実際はどのようなレベル（看護現象の説明，援助の

引き出し，理論の検証など）で使ったらいいのか私自身も含めて臨床ではまだ混乱し，悩んでいるように感じる。本研究の研究レベルでは，何が起きているのか現象の理解を目的とした研究であると考えられた。このあたりが，看護研究を開始した時の思いと実際の活用の難しいところと思う。しかし，患者の良い変化を丁寧に分析し，何が相手を変えたのか1事例からでも引き出しておくことは臨床の看護者の責務と考え，更に事例を重ねて頂ければと思う。

7席の込貝かつみさんは，聴力障害者の視覚的な能力を色彩認知という道具を利用して明らかにしようと試みられた研究である。聴力を失った患者さんの残された力を査定するために他の感覚器の鋭敏さ（代償機能と言ってよいか）を検査することが目的と考えられた。本研究の検査方法（色彩認知の検査）が臨床の看護者にとってはなじみが薄く，会場の出席者の理解に時間を要した。方法をみると検査を受ける対象者間，あるいはコントロール群との間に条件の違いが大きく，結果に個人差の影響が大きくでたものと考えられる。失聴者の看護をする時は，失った機能ばかりを問題にするのではなくもてる力を引き出す意味でも，こうした基礎研究を重ね，有効な資料としていくことは重要と考える。条件を考慮しつつ，また，看護の何処に生かすのか検討を重ね継続して頂きたい。

臨床における看護研究も広範囲かつ専門性の高いものが取組まれるようになってきている。座長を努めさせて頂いても用語の理解に難渋することが多く（これも論文作成上の課

題であろうが),私自身基礎学習の必要性を強く感じた。しかしながら,臨床のさまざまな看護現象から,なんとか良い方向へ整えられないだろうかという視点で始められる看護研究には心をうつものがあり,学ぶことも多い。1度限りの研究とせず,研究テーマを丁寧に

みかえし,方法を吟味し,臨床の中で生かせるものへと発展させていきたいものだと考える。

多忙の中,意欲的に取組まれた発表者の方に敬意を表するとともに,座長の機会を与えて頂いた事に感謝致します。